果樹

実　況

1　ウメ

(1) 生育状況（園芸研究センター）

園芸研究センターにおける「紅サシ」の開花始期は3月3日で、平年より9日遅く、前年より1日早かった(表1)。3月18日現在の開花率は「紅サシ」60.9%、「剣先」79.2%、「新平太夫」43.2%、「福太夫」64.1%であった。これまでの完全花率は「紅サシ」79.3%、「剣先」62.6%、「新平太夫」77.0%、「福太夫」74.4%であり、「紅サシ」では前年よりやや良好で平年並みの花質で推移している(表2)。

表1　紅サシの年度別発育ステージ

年度		短果枝花芽 (cm/個)	開花期（月／日） 始期	盛期	終期
2007	(H.19)	1.98	2/13	2/27	3/07
2008	(H.20)	0.81	3/02	3/17	3/26
2009	(H.21)	1.81	2/04	2/23	3/11
2010	(H.22)	1.13	2/25	3/06	3/19
2011	(H.23)	1.65	2/26	3/19	4/01
2012	(H.24)	1.67	3/12	3/28	4/09
2013	(H.25)	1.88	3/07	3/14	3/22
2014	(H.26)	1.28	3/04	3/18	3/26
2015	(H.27)	1.92	3/03		
平年値（1990-2014）		1.68	2/22	3/13	3/26
平年比		114	-9		
前年比		150	1		

表2 各品種の年度別完全花率

年度		完全花率(%) 紅サシ	剣先	新平太夫	福太夫
2007	(H.19)	80.7	64.6	85.1	76.0
2008	(H.20)	70.9	47.7	64.9	62.3
2009	(H.21)	82.8	60.9	81.0	78.6
2010	(H.22)	79.3	41.8	91.6	82.1
2011	(H.23)	85.7	70.1	89.5	71.7
2012	(H.24)	70.8	57.8	80.7	79.1
2013	(H.25)	91.0	89.7	96.6	86.6
2014	(H.26)	72.9	53.9	65.3	73.0
2015	(H.27)	79.3	62.6	77.0	74.4
平年値（1990～2014）		76.1	56.0	78.2	75.0

※完全花率は3月18日調査結果(累計)

(2) 地域状況

早いところで2月下頃から開花が始まり、3月17～18日の高温により各地とも開花が進んだ。

ミツバチの巣箱は3月30日および4月3日に回収される見込みである。

2　ナシ

(1) 生育状況（農業試験場）

発育速度モデルによる「幸水」の発育指数(DVI)は、3月16日現在で2.364である。昨年、同じ発育指数に達した日は3月18日であり、2日早くなっている。今後、気温が平年値(2010～2014年の平均)で推移した場合、4月20日頃(予測日4月26日)に開花盛期(昨年4月19日、平年4月19日)を迎えると予測される。

花芽のりん片がずれているが、発芽期には至っていない。

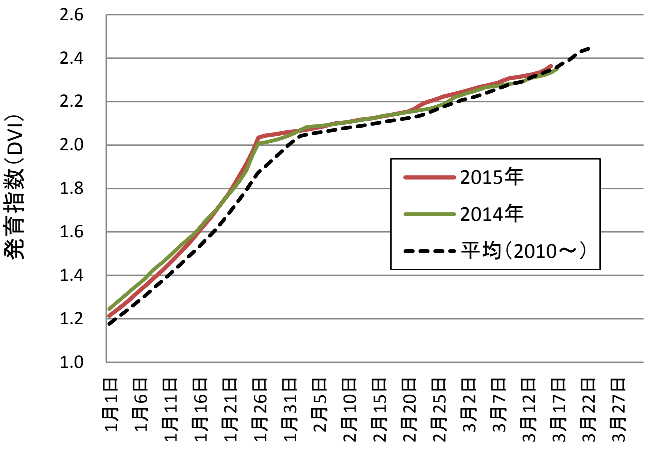

図1　ナシ「幸水」の発育指数の推移

(2) 地域状況

3月18日現在、露地栽培では、りん片のずれが見えてきた。昨年より生育は早い。

3月18日現在、ハウス栽培では、早いところで出蕾期を迎えているが、開花始めに至っていない。

3　カキ

(1) 生育状況（農業試験場）

りん片がずれてきたが、発芽期には至っていない。

(2) 地域状況

発芽前であり、特に変わったことはない。

4　イチジク

(1) 地域状況

3月下旬からハウスの保温を開始している。

5　ブドウ

(1) 生育状況（農業試験場）

3月17日から樹液の流動が見られた。

(2) 地域状況

ハウスの保温は、3月中旬～下旬に開始されている。

対　策

1　共通技術

(1) 除草・草刈り

草生栽培では、1年を通して、雑草との養水分競合により樹体や果実の生育を抑制する可能性がある。特に4月は、各樹種ともに、展葉～新梢伸長開始・開花結実など多くの養水分を必要とするスタートダッシュの時期である。早春からいち早く繁茂している雑草が養水分を吸収してしまうので、草丈が短いうちにこまめに刈り取る。エコファーマー制度では、有機物の還元による地力向上が求められているので、この点からも雑草の刈取りに積極的に取り組む。

なお、栽培面積が大きいため、草刈り作業が追い付かない場合は、除草剤を使用する。ただし、除草剤に依存すると、表土の流亡や地力低下などの悪影響が懸念されるので、1年間に2回程度の使用にとどめ、堆きゅう肥など有機物の積極的な補給で地力低下を防ぐ。

2　ウメ

(1) 病害虫防除

天候がぐずついて開花盛期～終期に低温条件が続くと、灰色かび病が発生しやすくなるので、開花終了直後の灰色かび病防除を確実に実施する。

4月は黒星病・アブラムシ類を主体とした展葉初期の基幹防除を適期に行う。

着果期間中のかいよう病には、マイコシールド剤で対応する。発生予防に用いる場合は、果実横径が10～15㎜に肥大した頃が本剤の散布適期である。雹・霰が降った場合は、降雹(霰)から2日以内に本剤を散布する。

なお、エコファーマーに認定されている農家は、除草剤を含めた化学合成農薬の使用成分数が合計11カウント以内になるように留意して、計画的に防除を実施する。

⑵ ウメシロカイガラムシ防除

ウメシロカイガラムシ第１世代幼虫のふ化時期の早晩は、春季の気温によって前後する。4月終わり頃から越冬成虫（カイガラ）が付着している樹で産卵～ふ化の状況を観察し、ふ化最盛期から最盛期直後にアプロードフロアブル等を用いて防除を行う。

⑶「剣先」の摘果

「剣先」は、出荷時期が例年6月前半に限定されるので、6月上旬にＬサイズ以上の果実を得るため、摘果を行う。結実が確認できる4月中下旬から作業を始め、連休終了までに摘果を終える。

摘果の基準は、10cm以下の短果枝では5cmにつき1果、10cm以上の結果枝では10cmに1果の割合で残し、病害虫やキズのある果実、小さい果実を優先して摘果する。1つの側枝の中では先端部の結果枝に着生した果実、1つの短果枝の中では先端部に着生した果実で大玉になる素質がある。明らかに小さな果実やキズ果を除き、先端部の果実を優先して残す。

２　ナシ

⑴ 摘らい・摘花

大きい果実をつくるには、細胞の数を多くすることがひとつの条件となる。開花から開花後１か月頃までは、果実の細胞数が増える時期である。摘らいや早期の一次摘果によって、前年から樹に蓄えられた貯蔵養分を今年収穫する果実に集中させる。開花から収穫までの期間が短い「幸水」では、摘らいが特に重要であり、優先して行う。

摘らいは作業可能な期間が短いが、道具を使わないので効率よく作業できる。果台の向きが横～斜め上向きのものを、１花そうに３～５花残すようにする。摘らいが十分できない場合は、引き続き摘花で対応する。なお、良品生産のための花そう数は、目標着果数の２倍程度である。多すぎると養分の浪費となり、少なすぎると摘果時に良果を選抜しにくくなる。

主枝や亜主枝の先端部･予備枝の先端･側枝先端２芽までの部分は、旺盛な新梢伸長が必要なので、葉を傷つけないように気をつけて、すべての蕾･花を摘み取る。

⑵ 人工受粉

自然に飛んでくる訪花昆虫にまかせた受粉は結実が安定せず、着果数不足になる可能性があるので、人工受粉やミツバチの放飼を積極的に行う。摘らい･摘花した場合は、人工受粉によって確実に受粉させる。

人工受粉の準備として、開花直前の花蕾を集め、葯を採取して、気温25℃・湿度30～50％の状態で開葯させ、フルイにかけて花粉を集める。また、花粉収集の手間や開葯器等がない場合は、輸入花粉を購入･利用してもよい。

花粉は石松子で５倍に増量し、梵（ぼん）天・筆・綿棒などにつけて柱頭の先端をたたくように受粉する。花粉は15℃から発芽し、めしべ柱頭の粘液も気温が高いほど多くなるので、暖かい日に受粉を行うのがよい。限られた花粉なので、すべての花に受粉するのではなくて、側枝を真向かいに見て、水平からやや上向きの1～2花に受粉する。

⑶ 芽かき

芽かきの目的は、徒長枝伸長による養分の浪費を抑え、樹冠部の受光体勢を良好にすることにある。主枝･亜主枝･側枝基部の上面や更新した側枝の切り口付近の不定芽から発生する新梢は、徒長枝になりやすいので芽かきする。主枝･亜主枝の先端が花芽で切り返してある場合は、２本の新梢が発生することがあるので、芽かきして１本にする。

(4) 病害虫防除

黒星病および黒斑病は、りん片脱落期から満開期に降雨が続くと多発しやすいので、使用基準を守って薬剤防除を徹底する。

3　カキ

(1) 晩霜対策

4月は移動性高気圧と低気圧が本州付近を交互に通過し、天候が周期的に変化しやすい。曇雨天で日中の気温が上がらず、夜になって空が澄みわたり底冷えする場合は、霜害の危険性が高まる。

この時期は戸外に温度計を常時設置しておき、気象庁から霜注意報が発表されたら気温を測定する。午後8時の外気温が5℃以下の場合、翌朝は降霜する可能性が高いので注意し、気温が０℃近くまで下がってきたらスプリンクラー散水を実施する。

(2) 病害虫防除

展葉初めに当たる4月下旬からカキクダアザミウマなどの害虫が活動し始める。カキ・マツ・スギ等の樹皮下で越冬していたカキクダアザミウマの成虫が新梢に飛来し、未展開葉を加害する。4月下旬に、オルトラン水和剤等で防除する。

4　イチジク

(1) 敷わらとかん水・排水対策

イチジクは乾燥に弱いため、敷わらをするとともに適宜かん水する。ハウス栽培の場合、保温開始頃から発芽までの期間の土壌水分を高めに保つと、発芽揃いがよくなる。また、過湿にも弱いので、圃場内に滞水しないよう排水対策を行う。

(2) ハウス管理

発芽期以降もハウス内が40℃以上の高温になると障害が発生するため、日中は25～30℃を目安に天窓やハウスサイドを開けて過度の温度上昇を防止する。また、適宜、かん水を行い乾燥を避ける。

5　ブドウ

(1) 芽かき

発芽に合わせて徐々に芽かき作業を開始する。短梢せん定栽培では、新梢数が主枝片側20～30cm間隔になるようにする。1回目の芽かきは、展葉2～3枚の時に不定芽と副芽をかき取る。2回目の芽かきは、展葉6～8枚の時に極端に強い新梢あるいは弱い新梢をかく。その後も新梢数が多ければ随時行う。

(2) ハウス管理

発芽期以降もハウス内が40℃以上の高温になると障害が発生するため、日中は25～30℃を目安に天窓やハウスサイドを開けて過度の温度上昇を防止する。また、発芽後から開花までは、極端な乾燥を避け、数日おきにかん水する。